

鍾以江

『日本における近代神道の起源——征服された出雲の神』

Yijiang Zhong, *The Origin of Modern Shinto in Japan: The Vanquished Gods of Izumo.*

本書は、副題にある「征服された出雲の神」を主軸に、日本における「近代神道」の成立成過程を描くものである。「近代神道」とは「宗教に非ざる公的神道祭儀」と「宗教的信仰」に分離した段階の神道と解される。「征服された出雲の神」とは、現在、出雲大社の主神に定位されるオオクニヌシのことである。

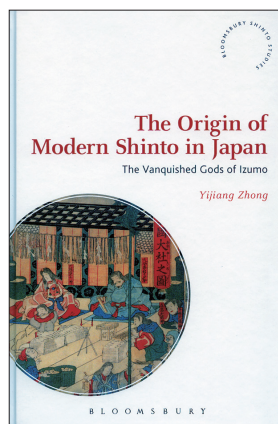
オオクニヌシが「征服された」神と位置づけられるのは、第一に記紀に描かれた国譲り神話に由来する。オオクニヌシは、大和政権が八世紀に編纂した『古事記』および『日本書紀』に、国土の創造神として現れる。しかしながら、高天原のアマテラスの命に従って自らが切り拓いた国土を譲り、出雲に立てられた神殿に隠退する。「征服」の主体は、したがって、アマテラスとその子孫とされるニニギおよび天皇、天皇を中心とした大和政権である。

井上智勝

オオクニヌシは、天皇を中心とした近代国民国家形成の過程において、再び「征服され」る。国家祭儀の中心にはアマテラスと天皇が位置づけられ、「宗教的信仰」の面においても所謂祭神論争の結果、主神の地位をアマテラスらに占められてしまうからである。

ただそれは、近代前夜までにオオクニヌシが再「征服」に値する力量を蓄えていたことを前提とする。オオクニヌシが、アマテラスや天皇を相対化し得るだけの力を身に纏^{まと}っていた時代、それが近世であった。本書の叙述が近世の開幕期である十七世紀から開始されるのは、そのためである。

以下に各章の内容を簡介する。第一章は、中近世移行期、出雲社が仏教の影響から脱し、本地垂迹^{ほんぢすいじやく}説によつて仏色を纏^{まと}わされた



Bloomsbury, 2016

スサノヲに代わってオオクニヌシが主神を占めた段階の叙述である。戦国期の当地の統治者尼子家によって神仏習合化が進められた出雲社は、寛文年間、江戸幕府と松江藩の全面的支援を受けて行われた修造途上において仏教色を一掃する。その前提には、近世武家政権成立過程における仏教の凋落と、朱子学者・儒家神道家による仏教排斥の思想があった。

第二章では、出雲信仰の民衆化が紹介される。十八世紀前期、幕府の財政窮乏により修造への支援が期待できなくなった出雲社は、御師おしの活動に活路を見出し、各地に講社が設立されるようになってゆく。「大国主」と漢字表記されるオオクニヌシは、「大國」すなわち「だいこく」の音通ゆえに福神の大黒とも習合して、国土創造の神から民衆に親しまれる現世利益の神へと神格の幅を広げてゆく。毎年十月に神が出雲に集まるため、その他の地で神が不在になるという神無月の考え方が出雲社と結びつけられて各地に広がり、縁結びの信仰も高揚した。

第三章では、十八世紀後期から十九世紀前半期にかけて、国学者によって神道的宇宙観が形成され、オオクニヌシが幽冥界の主宰神・魂の救済者として位置づけられていく過程が描かれる。国学者によるムスビの神、すなわち造化三神の形而上化にも言及される。それらの動向は、当時の全球的な「知」の流通、就中、西洋天文学と基督教の救済の論理の影響を強く受けたものであった。

死魂の行方と救済をも管掌するようになった神道は、内憂外患の世相の中で混乱する個々の民衆に安心を提供する「宗教」の相貌を具えた。

第四章では、後期水戸学者によるアマテラスの上昇、明治維新期の宗教政策の推移と、日本型政教分離へと至る過程が跡づけられる。明治初期の神道は近世までの展開の上に、祭儀・信仰さらには民衆教化などを包括する多義的な相貌を具えて立ち現れる。かかる神道は、「文明」の宗教である基督教と競合する可能性を帯びた。基督教への敗北は、政府が構築を目指す国家イデオロギーの根幹の滅失と、形成されつつあった「日本」としての自意識の解体を意味した。仏教の回復を企図する島地黙雷らは、国家と宗教に公私の区分を適用することによって、かかる危機回避の方向性を示し、それを達成する。

第五章では、明治初年の神道の多義性が惹起する問題と、神道の再定義の過程を描く。幽冥界の主宰神として神道的宇宙観の中心にあったオオクニヌシは、仏教・基督教とともに、なおアマテラスや天皇權威を相対化し得る存在であった。しかし、天皇とアマテラスを基軸にした国家の構築を目指す政府は、国家祭儀と宗教の切断によって競合を回避する。神道事務局での祭神論争にも敗れたことで神道的宇宙観が展開してゆく途は絶たれ、無毒化された出雲社とオオクニヌシは、近世に形成した民衆的基盤の上に、

教派神道の一つとして存続してゆく。

以上が本書各章の内容である。第一章の前には「導入」が、第五章の後に「結論」が配置されている。

アマテラスを相対化する存在としてのオオクニヌシの復活は、近世日本に横溢していたはずの、天皇やアマテラスを絶対的な価値とみない意識の端的な表現形態である。それは、その後に豊かに展開してゆくはずの神道の可能性を象徴するものでもあった。かかる事態の描出は、日本における日本近世史研究が考究してきた、天皇権威の相対化という課題とも共鳴し合うものである。

ただ、本書が目指す境地は、必ずしもその地点ではない。著者は「導入」において、オオクニヌシに焦点を当てた神道史の再構築は、列島を越えた歴史的視角を提供し、近代日本創出の過程を国家という枠組みを越えて描き出すものとなると述べる。兎角、日本という内向的な枠組みの中で語られがちな神道の歴史を、国境を越えた交流史の中に位置付けることが、本書の主眼なのである。

単に十八世紀後期からの西欧諸国の日本への接近と、それに對する日本の自国意識の高揚という位相だけではない。著者は特に、近代神道の形成過程において、神道の対極にあると考えられがちな基督教や西洋知識の影響による「知」の改編を論じることに関心を置いている。その影響は、西洋社会と日本が初めて直接邂逅

した織豊期において既に認められる、とする。織田信長が基督教と西洋天文学の知識を利用して仏教に打撃を与えたことや、著者が「神道の自立」と位置づける林羅山の神道説が朱子学のみならず基督教からも強く影響を受けた「超国籍の知の融合体」であったことが例示される。十八世紀後期以降に展開する国学者の神道説もまた、基督教と西洋天文学の知識に触発されて形成された。服部中庸は西洋天文学の知識を導入して神道の宇宙観を構想し、平田篤胤は神道の構築にカトリックの救済論を導入して神道的な来世観を樹立した、とすることくである。大國隆正もまた、儒教のみならず基督教と「万国公法」の影響下に自説を構築したという。

斯様に、神道は和洋中の「知」の混合体であったが、西欧就中ロシアの領土的野心に対抗し得る日本「固有」の外皮を纏ったため、その姿を曝け出すことがなかったと説く。また、内憂外患の世相の中で、神道が社会と個人の関係を表象するものに展開していった点にも、基督教国の国家戦略からの学びがあったことが示唆される。そのような神道の在り方は、維新政府が神道による国民統合を図る前提となった。さりながら、基督教は維新政府にとって脅威であり、「近代神道」の成立は対基督教政策と表裏の関係にあった。

このように本書は、神道が想起させる日本の固有性という幻想

を打破せんとする試みである。神道の形成に基督教や西洋知識が関わっていたことを強調することで、日本に自閉しない「知」や文化交流の在り方を考究するという著者の姿勢は、現在の日本の歴史や文化をめぐる学術状況にも向けられる。著者は、「結論」において内容を総括する代わりに、近現代日本における出雲地域やオオクニヌシの位置づけに即して、「戦後の研究者は、国家は脱構築し得たが民族は脱構築し得ていない」、それゆえに「日本は相変わらず国民国家〔単一民族国家、井上註〕』という位相に止まっている」と述べている。オオクニヌシは戦前期、外国への拡張主義に有用な神として機能した。一方で戦後においては、出雲は天皇の相対化を行う素材として用いられるものの、反対にその議論は日本という枠組みを出ることがなくなつた、というのである。

オオクニヌシが表象する戦前日本の植民地主義への評価は、確かに戦後の歴史・文化研究において、列島・半島・大陸の相互交流の議論を抑制する方向に機能している一面を有するようみえる。国境を越えた歴史・文化研究の必要性を説く研究実践は数多^{あまた}提出されているが、それらのいくつかが真にかかる呪縛から自由であり得ているか。そのような「知」を巡るある種の閉塞状況を打開する必要性を、著者は訴えていると考える。

著者は出雲の神に、その役割を果たす潜在力を見てすらいる。日本の神々にかかる役割を担わせることには慎重でなければなら

ないが——いや、著者に言わせればこの発想自体が「脱構築」されていけないのかもしれないが——、いずれにせよ全球化時代の現在、長く指摘されてきた日本の内向的な排他性からの脱却は、不可避のものとして要請されるところであることは疑いない。

以上、本書は、神道が国境を越えた「知」の交流の賜であることを示す試みであるだけでなく、全球化時代の日本の歴史・文化研究の在り方への提言でもある。細かな批判は今ほ措き、日本を相対化するための試みという点にこそ本書の意義は所在すると理解しておきたい。